はじめに

本書は前著『沈黙と無言の哲学』に続く書である。通称「語りえぬもの」が指し示そうと試みるが、言語の限界ゆえに毎回その試みに失敗するところの語りえぬものの存在性に対して確信を深めたからである。また『沈黙と無言の哲学』執筆当時には発見できていなかった新種（珍種）の語りえぬものも本書には載せることができた。

> われわれは無限が存在することを知っているが、その性質を知らない。たとえば、われわれは数が有限であるというのは誤りであることを知っている。したがって[1]数には無限がある。しかしわれわれは、その無限が何であるかを知らない。それが偶数であるのは誤りで、奇数であるのも誤りである。なぜなら、それに一（いち）を足しても、その性質に変わりはないからである。しかもそれは数であり、いかなる数も偶数か奇数である。もっともこれはすべて有限な数について了解されていることなのであるが。
>
> このようにして、人は、神が何であるかを知らないでも、神があるということは知ることができる（パスカル『パンセ』233）[2]。

このようにして、人は、語りえぬものが何であるかを知らないでも、語りえぬものがあるということは知ることができる。なぜならば、パスカルが、語りえぬものの一つである無限を取り上げてその存在性を主張し、それから類推して、これまた語りえぬものの一つである神の存在性を主張するのだから、それらの個々の語りえぬものの存在性を一般化して、〈語りえぬもの〉は存在することを類推することは、まんざら虎の威を借りた権威による推論でもなかろう。

本書の概要を述べる。第Ⅰ部の概要は以下のとおりだ。「私は誰？！」と発する。鏡を見ても見えているのは左右入れ替わった鏡像でしかない[3]。写された像（写像）を見ているのであって「見る」とは本来こういう行為だ[4]。私は私の体を見たことはある[5]が、私自身（心）を見たことがない。それ以前に見ることができなかったり表現ができなかったりするばかりではなく、私自身

（の心）が時空間的存在ではないから、それを見ようにもいつどこへ視線を向けてよいか分からない。

私は私をよく知っている。例えば、臆病で気が小さく小心者で往生際が悪いし、財布のひもが固く、自分にはケチでセコい貧乏性であるから、かえってそれを隠そうとして学生にはケチなことはしない。これだけ自分の性格を列挙できるのだから、自分の心をよく知っているのではないか？「そういう性格だよね。そのとおり。傍（はた）から見てもそうだ」という声が聞こえる。

しかし、私は誰なのか？「臆病で気が小さく（略）学生にはケチなことはしない」ような男。それでは答えになっていない。「是れ什麼物か恁麼に来る（これなにものかいんもにきたる）」[6] 式に突き詰めて一緒に考えていただくことを提案する。

こんな正体不明の人間がいて、あなたはそんな不審人物と日常的に対峙している。もしかしたらあなただけがまともな人間で、あなたを取り巻く人間もどきはみんなこんな不気味な存在なのかもしれない。そうではなくて筆者とあなただけが不気味な存在であって、それ以外の他者は健全な精神を持ちみんなとうまくやっているのかもしれない。こんな話題はあまりしないから（言葉にしたところで無意味だが）。

続く第Ⅱ部のタイトルは「『こだわるな』にもこだわるな」にさえこだわらなくなるとは、である。

「『こだわるな』にもこだわるな」にさえこだわらなくなりたいものだ。それなら最初から「こだわるな」とさえも言わなければよいのだろうか。

「沈黙に至るにはどうすればよいか」というふうに意識的に沈黙を志向しては沈黙に至れないので、どうしたらそうなるかを書いてみた。言葉にこだわる筆者であるが、特に言葉の使用と言及との区別とにこだわり、二つのこだわりを主張する。

一つめは、文中の一語の使用と言及との同時成立不可能性（**語の反転**）である。文の中のどんな語でも（例えば、リンゴ）**使用中の語を生け捕りにできない**。二つめは、定義する文の中で — 数学で言えば定義式の中に — ある語は使用中であり、それとは別の語は言及中であり、使用と言及とが共存している（**文内の共存**）。使用と言及との共存は、定義式だけでなく、定義文の中で緩衝

地帯の機能を持つ中立記号[7]を橋渡しして共存する。

ところが、文内の共存は真実であるにもかかわらず、その真実を言語化しようとすると、一文の中の使用と言及との共存・協調・分担・相互依存の関係が崩れる（**共存→崩壊**）。観察するという目的志向的な目つきでは、その真実を知ることはできない。そんな目つきではひっそりとした共存関係に気づかれてしまう。隠れて盗み見ようとしても、その魂胆（こんたん）によって共存関係は崩れてしまう。

言葉の使用と言及とがひっそりと共存していることを指摘しようとすれば、その共存関係はもはや崩壊しているから、言わぬなら真実のままだが、口にしてしまえば虚偽の発言となってしまう。

使用と言及との共存を眼差（まなざ）すとは、こうすることだ。ひっそりとした真実がある。「しーん」とした風景がある。しかしそれは本当に存在しているのだろうが、もちろん筆者はそのものを捉（とら）えることはなく、筆者が捉える限りの範囲の現象でしかない。よくない誤解は、「ひっそり」とか「しーん」という言語表現と原本とを同一視してしまうことである。それは色眼鏡で見た偏見なのだ。「しーん」と形容されるくらいの風景だから、「しーん」とさえもしていないほど静まり返っているのかもしれないし、そうでないのかもしれない。どちらかなのだ（排中律を採用すれば）ろうが、どちらなのかは筆者には判断し得ない。

言葉で飼い慣らされることのない天然の野生の本物である[8]もの自体を人間は認知できない。筆者は五感のフィルターを通過したものだけを感じ取って通過する前のそれ自体[9]（認知される前のそのもの）を「こうなんだろう」と姿形や音や匂いなどを内的に構成する。

認識者である私が、その 全体像という写像化される前の、言い換えると姿を現す前の、私が捉（とら）える以前の実物・本物に対して、以下のように反実仮想してみよう。もしも私が全知全能で自分が創造してよく知っているものの前に、あなたには見えないように衝立（ついたて）を置いたとしょう。しかし衝立に細い切れ目を入れて、その隠されたもののほんの一部だけは現れているが、そんな一部分からではあなたは全体を想像できないとする。

あなたはそのスリットからすり抜けてきた一部の情報だけを捉えて、それを

所与のものとして感覚するだろう。それが何かの一部であるとか3次元の立体的な物体の影であるということ（プラトンによる洞窟の比喩）を想像しないで、それが与えられた全体として、あるものとして認識する。

もし神から「あなたには、あるものの1%だけのある一部分を見せている」と聞かされれば、筆者は残りの99%を補おうと想像力をはたらかせると、クイズ番組を視聴しているようで頭が疲れるので、体を使っていろいろな物を持ってくるだろう。

例えばりんごとか自動車とかを持ってきて、その1%の部分だけを見るようにいろいろな角度から眺めては、先ほどまでは与えられた全体と思っていたものと持参してきたものの1%とを照合してみる。そして両者が一致したら、もしかしたら衝立の向こうに隠(かく)れているものは、この自動車なのかもしれないと候補を絞っていくことができる。

しかし、もの自体が存在したとしても、その何%が与えられているかという情報は神しか教えてくれない。人間は人間にとっての可視光線しか検知しないし、人間と犬では可聴(かちょう)周波数が異なるから人間には聞こえなくても犬には聞こえる犬笛があるし、コウモリやイルカは超音波を発して、その反射音から物の形や距離を測ったりするエコーロケーションを行っている[10]。

天然界だけではなく人間を尺度として開発される道具ならば、利用される範囲が人為的に定められている。例えば、電話で聞こえる声は「通常0.3kHz～3.4kHzまでの周波数帯域」に限られている[11]。

何かがあるらしい。それの一部だけしか捉えることができていないだろうというふうに知識・認識の限界を予感する。本当 はどうなのかは知り得ないし、ここまで懐疑すれば「本当」は意味を失っている。

不可知論なら、もっとイマヌエル・カントを勉強すれば、よかったのだろうか。しかしいかにカントといえども、定義式の中に使用と言及とがひっそりと共存していることまでは気付いてはいないだろう。OnとOffとが切り替わるように使用と言及は反転する。

数学ではある条件を満たすことによって集合を内包的に定義したり、数学用語を定義したりする。定義されるからにはそのように該当するものは招待されるが、そうでない影も対比的に存在するはずだ[12]。数学の命題を記述するには

肯定も否定も可能な言語でなければならない。そして数学を論理と集合論だけから基礎づけるためには、肯定と否定が対立できるように、この対概念（肯定, 否定）が崩れず対立を保持できるためには、上位（メタ・レヴェル）で矛盾と対立しなければならない。必要悪としての矛盾は、数学基礎論においては、対概念（肯定, 否定）の陰伏的定義に登場するし、その後は西田幾多郎の二重の反転（矛盾に陥ることなく、矛盾を生きる）にも登場する。

第Ⅱ部の各章の概要であるが、第3章は、論理・言語の章である。数学基礎論にも深入りしてしまって過敏な議論を展開している。その極端な考えを自ら「極端ニズムKyokutan-ism)」と命名した。

第4章では「ことばで表現できることなんかよりもずっと価値のある大事なことがある」とウィトゲンシュタインが示そうとしたことを、これまた当のことばで主張しようと試みては、もがいている。そして第5章では敏感過ぎるピークは過ぎ去り、中庸の徳へ向かう。デリダの脱構築に先駆けるウィトゲンシュタインに倣い、内面における騒めぎが去り、何も考えない哲学に至る。

そして最終の第Ⅲ部の概要を述べる。ここは読者と筆者との議論の場であり「哲学思考実験」なる問題を14題用意してある。筆者の開講する哲学の科目への受講生にとっては、毎回の授業で取り組み、提出が必須の課題となる。毎回の授業の後に、切り取り線に沿って切り取って提出してもらうが、氏名を書く以上に大事なことは、切り取るときにケガをしないことである。

もちろん、受講生以外の読者は、「哲学思考実験」に取り組んでいただくも、いただかないも、どちらも言うまでもなく自由である（教室で手渡しというわけにはいかないので）ikirukibouyuming@gmail.comのアドレスに宛てて、手書きなどされた思考実験を写メールしていただければ、読んで感想などをコメントさせていただこうかと考えている。

読者が受講生であってもそうでなくとも「哲学思考実験」への挑戦は一つの果たし合いとなるのだが、筆者はレフリー役に徹したいと思う。もちろん、私からは「あなた」としか呼べないが、その人が付け根（中心）となってたぶん世界が開けていて、ちょっとその陣地へ踏み込んでしまった私などは、その人（あなた・読者）から見れば、他者でしかないだろう。そんな筆者は他者なりに感想ぐらいは返せるが、筆者へ「哲学思考実験」を提出するまであなたは「言

葉にすると、口にすると、書いてみると、何かどこか違う」と何度も反芻(はんすう)するだろう。実は果たし状は、あなたからあなたへ送りつけていたことになる。

次に前著『沈黙と無言の哲学』との比較によって本書『言葉の極端ニズム』の特徴を述べるとしよう。語りえぬものはやはり語り得ぬが、それがどうしてなのかという理由〈語りえなさ〉を『沈黙と無言の哲学』では語りに語った。そして、我われは通称「語り得ぬもの」によって分かったつもりになってきたが、それの本当の名前を知らないし、そんな名前もない。語り得ぬものは人からどう呼ばれようが、振り返ることはない。

前著では、語り得ぬものをどうして語ることができなのかという由来を、そうできない理由として捉えて「語り得なさ」と呼んだ（『沈黙と無言の哲学 ― 〈語りえぬもの〉の語りえなさを語る』）。しかし、語られることがない由来（筆者の語感では「由来」は、理由にも原因にも両方に使う）は、人間が規約するレヴェルの社会的行為としては理由であるが、より根源的で人間では従わざるを得ないレヴェルの物理学に還元される原因も存在することを明らかにした。

いくつかの分野間にグラデーションではなく、明確な境界があるのか、出入り口があるのか、突破口もあるのか、脱出口があるのかというその境目(さかいめ)の「幅」や「厚み」について、①日常生活や社会生活　②認知科学的な認知のレヴェル　③数学的真理　④言語哲学、の四つで考えた。④は、上記①～③において、たとえそれが真理・真実であったとしても言語として（口述も記述も）言語の表現能力によって可能か不可能かということに執着した。

ほとんどの分野のArts and Sciences（学術：学問だけでなく芸術も含んだ分野）では、その真理を言語（自然言語・プログラミング言語・視覚言語・身体言語など広義の言語）で表現し、成果出力すると思うが、言語では表現不可能なものが存在すること（真理の真理たるメタ真理）を主張したい。

言語の仕様は脳の選択により決まるから、二分法からそれ以外への仕様変更もあり得るが、それは一世代の努力ではなく長期に亘(わた)る脳の進化レヴェルの発達に依存する。今のところ脳からそんな予定を少なくとも筆者は聞いていないので、言語の表現力の限界は二分法に由来したまま更新不可能な予定に違いない。

ところが、その、いやことばが機能しないことを言いたいのだから、指示で

きていない指示語は使わずに、こう（それでも無意味なのだが）言おう、言いたい。言語では表現不可能な真理があるというメタ真理の存在自体も驚愕すべきことだが、表現不可能な内容の方は表現不可能なまま（パスカルの威を借る）だが、言語では表現不可能な真理があるというメタ真理は言語表現可能なのだ。語ることができないところのその対象は語られないままという言語の限界があるにもかかわらず、その限界については語れるという、自らの限界を言語は語れる。

本書に通底するアイディアは、〈ことばの使用と言及〉との区別であり、それは筆者にとっては、ウィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein）発クワイン（Willard van[13] Orman Quine）経由ホフスタッタ（Douglas Richard Hofstadter）着のアイディアであった。最初にホフスタッタから彼自作の自己言及文とクワインを知り、次にクワインの〈使用と言及〉との区別へと遡り、そしてその区別の源流に辿り着くと、〈語りえぬもの〉を暗示するウィトゲンシュタインがいて、彼と再会した。

筆者は〈ことばの使用と言及〉との区別に拘泥し、その区別を心・生・世界・幸せ・夢・絵・禅・愛・時間・陶酔・失敗にも適用し、さらに本書においては、論理学的には数学へと適用し、倫理学的には懺悔にも適用した。取り扱った分野については、認知科学、数理論理学・数学基礎論、哲学（分野の中では、存在論・認識論・言語哲学）を基に人間が認知・想像・創造し得る範囲内において、**言語の二つの限界**の間に因果関係を見いだし、その根本原因を脳の仕様に還元した。これらの分野を横断し、ある時には視野を広げ、またある時には交わりを考えてフィルタリングによって純度を高めた概念を創出したつもりである。

本書の読者として以下のような読者を想定している。数学に劣等感を持っている人。哲学の中でも特に言葉にこだわるのが好きな人。学問がなくても神や仏を信じる心の持ち主。日常的に起きる何気ない問題を深く考察する人。段差のないところで躓く度に考えを深める七転び八起きする人。「もう気が狂いそうだ」と思っている人・そう口に出してしまっている人。「自分より賢い人はいない」と思っているずる賢くて傲慢な人、仏教の修行僧・仏教徒、神父様・牧師様・キリスト教徒、数学者、論理学者、哲学者等など。

さらに筆者の開講する哲学の教科書として読んでくれる受講生の読者へ。さらにその中には稀(まれ)にいる大学院に進学して今後とも（言語）哲学を志そうと思っている人へ（過去にも実際にいたし、今年度もいるだろう）。そのような人たちへ筆者は言いたいことがある。

哲学とは問うこと。できれば答えること。難しい学問だから単位が取れないのではなんて、みみっちいことは考えないこと（単位取得の意欲さえあれば、呼び出して研究室で一対一の個別授業で単位を認定できるまで、しつこく議論するから）。

考えに考えたのなら、答えは出なくてもよいから。考えに考えて考え抜いた天才哲学者ウィトゲンシュタインは、考えない哲学の境地に至るのだから。「哲学は答がないんですよね？」と聞かれる。しかし決してそうではない。答えの候補はあなたの中にあると筆者は信じている。ただぼんやりとしていて、ことばになっていないだけ。答えを外側に出さないから、内側にも答がないと思っているだけ。いっしょに答えを出そう。筆者がしてあげられることは、その答えの候補を言語化させて引き出すことだけだ。ソクラテスの産婆術(さんばじゅつ)・Socratic irony(ソクラテッィク アイロニー)式のお節介(せっかい)からの問答であって、皮肉(ひにく)や嫌味(いやみ)を込めてはいない。

かつ、上記で想定された読者以外の読者もメタ想定している。よって、上記で想定した部分集合に入る読者とそこからはみ出した補集合に入る読者とを合わせた全体集合（全員）を待っている。そのように読者を（メタ）想定している筆者は、どのような筆者でありたいか、あるべきかと言うと、こうだ。研究会や講演会やコンサートなどで発表する側が自分の好きなことしている、したいことを仕事としてできている（「天職」と言うのだろうか）のを見かける。

とてもにこやかに自然と笑顔がこぼれているのを見ると、こちらも楽しく学ぶことができる。聴衆側が感動をもらって感謝しているのに、壇上やステージからそのスピーカーや歌手が、「今日は来てくれて　本当にありがとう」などと言ってくれる。

筆者の場合、考えがまとまってからの執筆ではなく、苦悩しつつ勉強しつつの執筆であったが、筆者が笑顔で書き、描いたことで、読者のあなたも微笑(ほほえ)んだり爆笑したり目を潤(うる)ませたりすることを願っている。

【注】

1　パスカルは二分法を用いて考えている。

2　『世界の名著 24 パスカル』「パンセ」233、前田陽一責任編集、1966 年、中央公論社　p.163 より引用。傍点は筆者による強調。

3　スマフォのアプリではその反転を反転し返して写しているものもあるだろう。しかし、写しは写しに過ぎない。

4　りんごを口に入れれば、りんごは移動しているが、りんごを見ているとき、りんごは目の中に入って来ない。光を利用して網膜スクリーンに投影して写しているから、モデルのりんごは微動だにしていない。

5　12 桁のマイナンバーでも指紋でも DNA 鑑定でもお尋ねの人を特定できそうであるが、それはその人の体に関することである。服装や髪の色や身長や体重や歩き方の癖など、いろいろとその人を特徴づける要素はあるが、それらはすべて体に関するものである。おまわりさんに捕まってしまうときに手がかりとなる情報であって、手錠をかけられても、裁判にかけられても、牢屋に閉じ込められても、囚人番号で特定されても、それは私ではない。私の体が拘束されているのであって、〈私〉（＝私の心）は自由だ（反省心のない囚人だとは誤解しないでね）。

6　愛知学院大学 禅研究所 https://zenken.agu.ac.jp/zen/familiarity/h12.html
臨済禅黄檗禅 携帯サイト http://www.rinnou.net/mobile/words/zengo/200907.html
を参照のこと。

7　定義式においては「≡」が緩衝地帯の機能を持つ中立記号であり、日本語の定義文では「とは」が、それである。

8　「紙の上に書いている、言葉の「りんご」ではなくて、「『本物のりんご』のことだよ」と言っても「本物のりんご」もやはり**言葉への写し**でしかない。われわれは、言葉を使用していくら、「本当の」「実際の」「実物の」という修飾を付しても、言葉の世界から実際の世界へと脱出できない。言葉を使っている内は、言葉の世界から抜け出すことはできない。

9　上田閑照の言う「言葉が言うその当の事柄として、言われて事柄になる以前の、いわば「前」事柄 ― “Vor-sache”（フォア ザッハ）である。詳しくは第 1 章「根源的な付け根」に書いた。

10　『音の雑学大事典』第 1 章「音のひみつ　動物に聞こえる音、聞こえない音」https://jpn.pioneer/ja/carrozzeria/museum/oto/01_a07.html を参照した。

11　「一般専用サービスの技術参考資料 第 14 版 2017 年 1 月 東日本電信電話株式会社
https://business.ntt-east.co.jp/support/analog/download/sd.pdf　より引用した。

12　そうでなければ無条件に定義されてしまい、緩やか過ぎる定義となろう。矛盾した体系からは、任意の肯定命題とその否定命題とが同時に証明されるという有難みのない（証明されても「それが何だと言うのだ!?」）権威によるお墨付きがない無政府な状態となるのと同じようなことになる。

13　“Van”の発音は、親愛なる関係であるCarnap（カルナップ）がQuine（クワイン）をVan（ヴァン）ではなくVan（ファン）と呼んだことに基づく。根拠となる出典はクワインとカルナップとの二人の往復書簡である*Dear Carnap, Dear Van The Quine-Carnap Correspondence and Related Work*: Edited and with an introduction by Richard Creathだったか、その和訳本に付いた解説だったかである。

表現の極端ニズム
―― 反転する二重構造を生きる ――

目　次

はじめに…… i

第 I 部
「私は誰?!」と発する本人と向き合うあなた

第 1 章　世界の根源的な付け根…… 2

第 2 章　ゼロ・ヴェクトルの軌跡を描くブーメラン
（私→あなた→私）…… 9

第 II 部
「『こだわるな』にもこだわるな」にさえこだわらなくなるとは

第 3 章　語り得なさは、理由か原因か？…… 23

1. 数学基礎論者をシェルパに正当化根源への旅に出る　26
   (1) 痒(かゆ)いから掻(か)く・洗うほどに汚くなるルターの手　26
   (2) 自然数は続くよ、どこまでも ♪：ペアノの敷く線路　27
   (3) 正当化する側をもメタ正当化する構築者　28
   (4) 暴走する言語列車（ノン・ストップ）　33
   (5) 無限を対象化することと無限を表現すること　35
   (6) 分かり切っている場合だけ省略記号「…」が許される　36
2. ことばを生け捕りにできない　38
   (1) 五十年前の自分と向き合う　38
   (2)〈現在地の使用〉と〈現在地への言及〉：単なる方向音痴(おんち)であろうか？　44
3. いない いないばぁ～　56
   (1) 二分法に由来して起こる言語の限界　56

(2) これまでもずっといつもだったのに、不意にいつもがやって来た　57
(3) ある出来事から今までを振り返り、過去への認識が改まる　57
(4) デデキントの切断　60

4. ふたつのつぼ：ルビンとクライン　62
(1) ルビンのつぼ（英：Rubin's vase）　62
(2) クラインのつぼ（独：Kleinsche Flasche）　66
(3) 存在すれども区別なし　76
(4) 数学的メスの切れ味は連続する実数を切断する　83
(5) 定義式内の使用・言及の共存と崩壊　89
(6) 誰でも聖徳太子　110
(7) 否定できない言語体系は肯定すらできない　116
(8) 二分法・反転・二項関係・越境　119

5. ちゃぶ台をひっくり返す　124
(1) 偶像崇拝禁止：仏に逢うては仏を切る（柳生十兵衛）　124
(2) 予告どおりにちゃぶ台をひっくり返す　126
(3) 集合は可視化できない　126
(4) 筆者による〈極端ニズム（Kyokutanism）〉　128
(5) 透明な論理のレールを言語が走る　131

6. 生け捕り禁止令（理由：規約的真理）　132
(1) リリカちゃんの知らないもの　138
(2) 切れない縄：ちびっ子相撲の土俵　142
(3)〈語ること〉と〈見ること・買うこと〉　144

7. 言語は脳による発明か、発見か？　155

第4章　ことば　知恵　悟り …… 187

1. 書く動機を奪われた千栄子　189
2. 千栄子に書くことを動機づけ育成してくれた小学校の担任教師　194
3. 千栄子から書くことを剥奪した中学校の担任の教員　200
4. 懺悔を使用することと懺悔へ言及すること　200
5. 踊る阿呆に見る阿呆　201
(1) 比べるとみじめ ⇔ 絶対的幸福　202
(2) 小欲知足　205

(3) 毎日がスペシャル　Happy Birthday to ME ♪　207
(4) プログラミング料理からは逃れられぬ　212

第5章　混ざらねば混ぜてみよう、ホトトギス …… 220

1. 無価値な無意味と絶対的価値を有する語り得ぬもの　222
2. 東洋的受容の仕方　225
3. 東西思想の融合　226
(1) 家庭内東西思想　226
(2) 井の中の蛙(かわず) 大海(たいかい)を知らず・プラトンの洞窟　227
(3) 神をスクリーン・ショット（スク ショ）できるか？　227
(4) 教団を成さない 非 - 無神論な宗教　228
(5) 東を生きつつ西をも生きて 矛盾を生きる　231

第Ⅲ部
読者と筆者との議論の場

第6章　哲学思考実験…… 239

おわりに…… 240

参考文献 …… 254

索　引 …… 256

第Ⅰ部

「私は誰?!」と発する本人と向き合うあなた

言語の構造を骨抜きにすると言語は機能しなくなる。黒いバックグラウンド（背景）を保護色として黒子（くろこ）は人形を操っているが、人形が操られていることは隠蔽（いんぺい）されて人であるかのように観客の目に映る。我われは言語を使用していることをメタファーに言い換えよう。電車に乗っていて列車に乗っていてそのレールをに従って走っているにもかかわらずそのレールを意識することはないし、気付いてはいけないし、気付けないのだ。

軋（きし）むような音がして身を乗り出してもたぶん見えないだろう。あなたがとても体が柔らかくて見えてしまうというのであればそのレールは透明だとさらに条件を強めてできるはずがないことに喩（たと）えよう。

言語とはこのように我われユーザーに対して構造は隠蔽されていて、使いやすいようにブラックボックス化された製品なのだ。論理は言語を統治しているが、我われ言語のユーザーにはそのことが気づかれないように巧妙（こうみょう）に支配をしている。言語の黒幕（くろまく）は論理である。

第1章

世界の根源的な付け根

言語は饒舌だが、我われは何でもかんでも手当たり次第に表現しようとしてしまう。言葉はなくても人間が言葉を使って言及する前に、ひっそりと、表も裏も存在しているのではないのだろうか。表裏という概念めいたものは人工物・発明物だとするならば、天然のしいたけはひっそりと存在していたのではないのか[1]。

簡単に言えそうな「誰も分け入ることのない森の中にひっそりとシイタケが生息している」ということすら言えない。ひっそりとした存在とは、どんな他者からも干渉どころか、誰の意識の上にも登らない存在であろう。無を対象化できないし、「想定外」という言葉を想定や定義できても、その言葉の指す事実や事態を想定できてしまっては矛盾してしまうように。

「写像」とは、モデルである原本は移動も引越しもしないで、その写し取られた像（イメージ）だけが動き、あなたの中に取り込まれる行為だ。そして取り込んだ像だけがあなたのものだ。おいしそうな匂いがお店から外へと立ち込めても、財布が軽いので食べたつもりになってその場を去っても、店主は「泥棒～、匂いを返せ」と追いかけて来ないのは、あなたが原本までは持ち去っていないからだ。

写像の一種である言葉も原本はそのままに、音声言語であるならば空気振動へと、記述言語であるならば紙や白板へと写し取る。あなたが原本を写し取ろうと意識したら、原本はその行為の対象となるので、写し取られた写像（音声言語なり記述言語なりの命題）は、その行為によって偽となる。写し取った像から思考の対象とその原本はもはやひっそりとはしていない。言葉で触れることのできないものなのだ。

言わなければ、ひっそりとした存在なのに、それを言ってしまう過干渉ゆえに、想像を開始させしてしまい、ひっそりとしたままにという目論見を台無

しにする愚(おろ)かさ。ウィトゲンシュタインはこの愚かさの轍(てつ)を踏まない（幾度も踏んではやがて踏まなくなったのだろう）。彼は語る哲学から考えない哲学へ移行した。

誰も分け入ることのない森の中にひっそりとしいたけが生息(せいそく)していること自体は、森に足を踏み込まずにドローンで空中撮影しようとしても、超高性能小型隠しカメラで撮影しようとしても、技術の進歩やどんな手段を選ぶかには全く依存しない。

対象物が、即自的な（「あるところのものであり，あらぬところのものであらぬ」）ものでしかないとか、観察されていることに気づいていないとか、観察により心理的な影響を受けない種(しゅ)の動物であるとかいうような対象化されている側にまったく依存しない。そして望遠鏡で見るとかコンタクトレンズで視力を矯正するというような対象物と観察する主体との間に介在してくる道具とは全く独立に、あなたがあなたの外界からあなたへと対象物を認知する段階において、あなたの感覚器官というフィルターを通していることが重要である。

外から内へと入るのだから、そのままというわけにはいかない。もしも素通(すどお)りはできたのなら、フィルターは何をしていたのだ。そのまま通過できるなら、外にいるまま内に入って来ていないのか、またはもともと（起源は任意でよい）内にいたのかのどちらかだ。なぜならば、そんな芸当(げいとう)ができるからには、内も外もあったものではない。内と外との対比によって内と外は対(つい)で存在できる。少なくとも外から内へ来(こ)れるためには、外から内への入り口である玄関という膜（フィルター）を通り抜けなければならない。

ここで上田閑照(しずてる)が、禅の道を歩み始めて 1959 年秋から 3 カ年余り、ドイツのマールブルク大学留学中にドイツ語でドクター論文を書いていた時の経験を引用する。

> 日本語に比べて遥かに不自由なドイツ語で書くことは、私のドイツ語ででも言いうるように問題の事柄をよく見、よく考える訓練、すなわち、日本語で言う場合とは違うにしても、日本語で言う場合に劣らないほどに言いうるよう事柄を分節する訓練を私に課した。それはドイツ語への訓練というよりも、私にとっては、事柄を見る訓練であった。その後もドイツ語で書く機会が多かったが、日本語で書く場合も、いずれの場合も、問題の事柄（言葉を離れて事柄はあらわれないに

> しても、言葉が言うその当の事柄として、言われて事柄になる以前の、いわば「前」事柄 ― “Vor-sache”（フォア ザッハ）が、日本語とドイツ語の「間」にあらわれて、それが、ドイツ語で書く場合はドイツ語ではっきりしてくる、日本語で書く場合は日本語ではっきりしてくるというようなことであった[2]。

上記引用から、事柄が存在し、そのような外界の事柄を言語化以前に認知していて、それを各言語に応じて分節して[3]言語化していることが分かる。ウィトゲンシュタイン ― 黒崎宏に共通する見てとる見方がここにあり、白隠（はくいん）禅師 ― 鈴木大拙（だいせつ）に共通する肯定・否定に中立な「そうか」がここにある。

筆者にはプレゼントしたい品がある（誰へ？）。親（した）しい仲ではあるが、やはり箱に詰めたり、リボンをかけたり装飾をする。品物は確かに、ただ、ここにある。しかしそれを「中身」と呼んでしまう時に、それに対して外が現れ出（い）でて来る。

以下の対話は筆者の極端（きょくた）ニズム（Kyokutanism）への誘（いざな）いである。

A：「やはりドキュメンタリーは違うね 。リアリティがあるよ。何と言っても実録だからね」。

B：「あっ、そうだったのか。目が覚めました。実録ということは、実際に過去にあった（またはリアルタイムにライヴ中継しつつ録画しているのかもしれないが）ことを記録されていて、写しを私は見聞きして追体験していたんだ。私はあたかも彼であるように彼になったかのように思っていたのではなく、水を差される前には、私は彼でした。私は彼の人生を一炊（いっすい）の夢（邯鄲（かんたん）の枕）のように時間は何分か知らないけれども、いや時を忘れて我を忘れて私は彼になっていた（**彼を使用中**）。つまり彼を「彼」と呼んで客体化してはいなかった。彼は私だったんだ。

　でもそれは写し取られた視覚的な聴覚的な生傷の痛みも伴う写像であり、言語化された作品だったのですね。

A：「フィクションと違ってリアリティがあっただろ？」

B：「いや、現実を生きている時にいちいち「現実だ」と確認などしない。信じている人に「まさか、もしかしたら？！」という疑いの一瞥（いちべつ）を投げかけることはない。私は今生きている、まさにその時にわざわざ私は生きているとは言わない。そう言えるのは振り返ったときである。

現実感を無意識に感じ取っている時、現実感が内部から湧いている時、意識的にリアリティを感じていないし、検知していないし、言語化などしていない。

隠れ家的存在のお店や取材を拒否するお店が報道されてしまったら、どうだろうか？秘めたるものは露呈してしまったら、もはや隠れてはいない。

では言語化しては台無しになることなので、ここに言語化して主張はできないのだが、だからたぶんとしか言えないし、言ってしまっては先ほども自覚的に諦念したように無駄になるのだが、事実はひっそりと存在しているに違いない。木が生えているとか、悟った人がいるとか。でも「私は謙虚だ」「私は無我夢中だ」「私は悟っている最中だ」はおかしいだろう。

無我夢中や悟りの境地[4]なら主語で表現される主体の自覚はないだろうから。ただ、悟った人、覚者がいるだろう。それは事実として成立している。しかし、そのひっそりとした事実（原本）と言語化されたコピーとは別だ。別なのだが、そのことは言語化できない。

筆者が「原本」と名指すまでひっそりと原本であったものが、指差されて言語化されて現実世界から言葉の世界に写像[5]されてしまうからだ。

ある人Aが他者Bを指していることが事実なら、指し示す表現と言うものが必要となってくる。Aが起点（始点）であり、Bが終点となり、A→Bという向きの矢印が設定される。ところが、私ではないA、Bのことを客観視するではなく、Aが私の場合にはこの起点（始点）は異常なくらい特異なのである。その特異点は私の世界にはたった一つしかない。

そんな私とあなたは向き合っている。あなたが知的生命体であることは前提していない。ロボットやAIでもよいし、テューリング・テスト[6]に合格していれば十分に「あなた」と呼ぶ。A→Bという向きがあるならば、私のようなことを考えるのは私しかいないのかもしれないが、逆向きの対称性を想定し、それは私の頭をぶち破らないとできそうにない検証不能なこととだが、非対称ではなく、対称性を期待している。A→Bの対称はA←Bの向きである。私とあなたとの関係で言えば、〈あなた→私〉の向きだ。私はこう思っている。私だけが〈私であって、あなたは私にとってはあなたでしかない。あなたは私ではないし、私になることは不可能だ。しかし〈 私→あなた〉と〈あなた→私〉

との対称を大前提したく、私の方から「私だけが〈私〉である。あなたもあなたにとっては「私」なのだろうけれども、私からするとあなたは、やはりあなたでしかない」と言うように、オウム返しではなく自発的に同じ[7]セリフ「私だけが私であって、あなたは私にとってはあなたでしかない」と言って欲しい。

しかし未だかつてお願いをすることなしに、そう言ってくれた人はない（お願いして一人だけ願いを叶えてくれた学生がいることは「おわりに」に書いた）。「私だけが私であって、あなたは私にとってはあなたでしかない」と私が言うように、あなたを起点（始点）として〈あなた→私〉の矢で私を指してほしいのである。

私のクローンがいたら、そうしてくれたのかもしれないが、私は一人しかいない。だから、結局あなたを折り返し地点として私は一人で壁打ちをしているようなものである。あなたはあなたを起点として発射しないで、私は最高に高い望みをあなたに投げかけるが、それは反射でしかない。私を起点として発したブーメランが私に戻ってくる。折り曲げて自己言及させることになる。

「私だけが〈私〉である。あなたもあなたにとっては「私」なのだろうけれども、私からするとあなたは、やはりあなたでしかない」と。結局、私があなたに発した言葉は、投げたブーメランとなって、その描く軌跡は0ヴェクトル（長さは零（ゼロ）で向きはどこを向いているやら不定）になってしまう。

【注】

1　「シイ、ミズナラ、クヌギなどの広葉樹の倒木や切り株などに発生します。日本では鎌倉時代の頃から食べられていたようです。江戸時代には現在の原木栽培の原型となるしいたけの、乾しいたけが広く出回るようになりました。栽培は、原木栽培や菌床栽培で行われています」（農林水産省aff 2021 OCTOBER通巻610号「ごちそう“きのこ”」https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2110/pdf/aff2110_all.pdfより引用。栽培もされるが、天然に発生することがわかる。傍点は筆者による）。

2　☆☆☆☆上田 閑照［1997］『ことばの実存：禅と文学』、筑摩書房、pp.262-3より引用。傍点は筆者による。

3　サルトルの小説『嘔吐（おうと）』の中で、ロカンタンは、分節化を許さない即自存在（そくじそんざい）、その中でも特にマロニエの樹の根を憎悪（ぞうお）する。しかし、役立たずで醜悪（しゅうあく）で嘔吐を催（もよお）させるマロニエの樹の根を、筆者は分節化の許可を得ずとも、分節化できてしまう。